第九章　助動詞論

一

助動詞といふものは動詞の語尾に膠着して複合語尾を構成し、かくてその陳述性を發展せしめるための材料となるべき文法語である。一體、動詞には何が故にかゝる助動詞の如きものが必要であるか。同じく陳述語の中でも、形容詞には普通かやうな助動詞の如きものを膠着せしめる必要がないにも拘はらず、動詞に於てのみ特に之を必要とするのは如何なる理由からであるか。

動詞といふものは如何なる性質の語であつたか。それは現象的屬性觀念を以て陳述する語であり、單なる狀態に時性を乘じたる四次元的內容を有する、極めて複雜な陳述語である。故に形容詞の如く、何等かの修飾素が之に先行しその觀念內容を顯示すればそれで滿足する如きものではないのである。動詞に先行する修飾素は種々の狀態觀念的のものであるが、動詞的陳述はかやうなもので割り切ることのできないものである。そこで先行的に更に實體語を以て補充素に立たせ、補充關係といふものが種々に成立してゐるのであるが、それと同時に、かゝる先行的な工作、觀念的構造に呼應し、或はそれと別個に後行的工作、文法的構造といふものが行はれてゐるのである。卽ち修飾關係とか補充關係などといふ種々の從屬關係による先行的工作を行つても尙盡すことの出來ない動詞的陳述性

を顯現明示するために、或ものは先行的工作と呼應し、或ものは獨自的に後行的工作が爲されるのである。

助動詞が動詞の複雜な陳述性を延展開示するための文法語であるといふ點に於ては、世界共通的である。しかし日本語の助動詞は動詞に先行せしめたり挿中したりすることは出來ない。動詞に先行して關係するものは、修飾素とか補充素とかといふものの觀念的工作であつて、それは文法的構造ではないのである。日本語に於ては如何なる場合と雖も文法素が先行的となるといふことはないのである。否文法素でなくとも、更に文法素相互の間でも、より文法的なものは常により觀念的なものに後行するのである。それが日本語の動かすべからざる構造原理でなければならない。故にこの助動詞の如きものも常に動詞語尾の後に膠着して行くのである。再語尾的なものとして動詞語尾の何等かの形に添接せられるのである。斯くて動詞語尾は、助動詞の膠着する場合に複合語尾とも稱すべきものを形造るのである。山田博士が助動詞を複語尾と稱せられる所以のものはそこに在るのである。日本語では助動詞は動詞の複語尾として添着せられるものでなければならぬ。しかしそれは陳述性延展の必要に應じ外附せられるものであつて、動詞に內生しどこまでもその動詞に固着してゐる活用語尾とは異なるものでなければならない。助動詞は動詞の複語尾として添着せられるものであるが、それは複語尾そのものとなり、その動詞に固着して行くのではなく、陳述性延展の必要により外附せられる文法語でなければならぬ。助動詞は離接的な文法素である。

助動詞は離接的な文法素である點は助詞と軌を一にするのであるが、助詞と助動詞とは本質的に異なるものでなければならぬ。助詞は文を成し句を構へる立言的要素として節を形成して行く形質であり、寧ろ活用現象などと同樣に考へらるべき成節素であるが、助動詞は成語素の一つである。助詞は節を形成する文法語であり、助動詞は語を

形成する文法語である。一體、節といふものは、それが斷止し或は連續して文や句を成立せしめんがためのものであるところから、それが形成せられるに當り、斷止するのであるか連續するのであるか、又斷止するとすれば如何なる形で斷止し、連續するとすれば如何なる後行素に連續するのであるかといふ如き後行的配意といふものが常に爲されなければならぬ。然るに語といふものはかゝる節の素材であり、差當つて斷續には與らない性質のものであるから、かやうな後行的配慮が行はれないものでなければならぬ。勿論語と雖も潜在的待機的狀態としてかゝる斷續相を內含してゐるものであるが、それが所與的なものであらうと構成的なものであらうと、少くとも語としてある以上は後行的配慮は未顯的であるといふことがなければならぬ。こゝに於て節形成素としての助詞が添加せられる場合には、然るべき後行的配慮、卽ちその後へ如何なる要素が來るか、連體的であるか連用的であるか將又斷止するかなどといふことが常に先決問題とし問はれなければならぬのであるが、語形成素としての助動詞が添接せられる場合には、よしかやうなことがあつても、それは寧ろ二義的のものであつて、先づ如何なる性質の動詞的陳述に延展開示するのであるかゞ問題となるべきものである。下への慮りではなく上への慮りである。勿論、助動詞には種々の活用現象があるのであるが、それは上への慮りにより本動詞に添接せられてからの問題である。助動詞が本動詞に膠着すれば、本動詞の行ふべき後行的配慮が一切この助動詞語尾に轉嫁せられるのである。助動詞に活用云々といふことは、助詞に不活用云々といふことが二義的であると同樣に第二段の事柄でなければならぬ。動詞に膠着し動詞の陳述性を延展しさへすれば必然的に天下つて來る事柄なのである。

助動詞は語の形成素であるといつても、それは嚮にも言つたやうに、語尾を工作し複合語尾を形造るに過ぎない

のであつて、それ以上の語幹とか語根とかといふ、語の語彙的本質部位に一切手を觸れるものではないのである。故に成語素としては一面から考へれば輕い意味のものでなければならぬ。語彙そのものを增殖し或は派生語を形成して行くものではないのである。謂はゞ動詞語尾を豐富にせんが爲の成語素である。動詞そのものを豐富にする意味のものではなく、動詞の語尾だけを增殖せんとする意味のものである。語尾的成語素、語尾形成の文法語である。所與動詞の語尾だけでは遺憾なくその動詞的陳述性を發揮することができないために、更にかゝる文法素を以て補強し、かくて本來的動詞語尾の外に複雜多岐なる動詞語尾を成立せしめて行くためのものである。故に成語素として語彙的方向から之を眺めれば、或は輕微なるもの、辭書的價値の乏しいものと言はなければならぬかも知れぬ。それは複語尾とか再語尾とかと稱せらるべき輕い意味のものと見なければならぬかも知れない。しかし之を文法的方向から眺めると極めて重要なものである。文法素を豐富に現出せしめて行くために特に成立せる語として、文法語中特異な地位を占めてゐるものと言はなければならぬ。西洋語の助動詞の如く、單に動詞を補助するために置かれるものではなく、更に動詞語尾に添接し之を補強し豐富にして行くための文法語である。動詞語尾の繁殖素としての文法語である。

以上の如くであるから、助動詞は之を一般文法的に言へば動詞の陳述性を延展せんがための語である。しかし日本語ではそれは常に動詞に後行する文法語でなければならぬ。動詞語尾に膠着し動詞の文法的構造を形成するものでなければならぬ。かやうに助動詞は文法語として本運動に後行するものであるとしても、それは助詞の如く節を形成するための文法語ではないのである。斷續關係的のものではないのである。助動詞にとつて斷續的後行の配意

は第二義的でなければならない。助動詞は接辭とともに成語素の一つとして考へて行かなければならぬものである。語を多様にすることを本質機能とする文法語でなければならぬ。しかしそれは、動詞そのものを全面的に成立せしめる如き成語素ではない。勿論語彙的成語素の如きものではない。助動詞は常に動詞語尾のみに關する成語素でなければならない。動詞語尾に添接することにより新な動詞語尾を多様に現出せしめ、之を以て動詞的陳述性を開拓せんとする文法語である。

二

助動詞は、動詞語尾に添接し複合語尾を構成することにより、その動詞的陳述性を延展開する成語的文法語である。隨つて助動詞を考察せんとするには、先づ如何なる動詞語尾にそれが添接せられるもの　あるかといふことを檢討しなければならぬ。而して次にかく形成せられたる複合語尾は如何なる動詞的陳述性を表示するものであるかを觀察しなければならぬ。以上の二は助動詞に對する本質的考察であるが、それに次いでかゝる助動詞の活用現象を一應見渡して置かねばならぬのである。

從來採つて來た助動詞の範疇づけはその最初から助動詞の表示內容を問題としたのであつた。卽ち受身であるとか過去であるとか推量的であるとかといふやうに助動詞を考察することが先決問題であるかの如く考へられ、この方法を以て總て助動詞をそれ〴〵類別せられて來たのである。しかしそれでは助動詞を眞に文法學的に考察したものではなく、そこに語彙的見地が多分に混入し、隨つて助動詞組織は極めて弛緩せるものとならざるを得ない。そ

の結果「だ」「です」「なり」「たり」の如きものまでが助動詞の中へ潜入して來るのである。助動詞は動詞的陳述の延展として矢張一つの緊密な組織を成してゐるものと思ふ。殊に日本語の助動詞の如く、動詞語尾に膠着するものに於ては尙更のことである。一體助動詞考察の最初は、歌學的文法の當初に於て見られるやうに、多くは語彙的考察に終始してゐたのであつた。然るに國學的文法、殊に活語斷續譜とか詞の八衢の如きものからは、之を活用語尾への所屬を以て範疇づけられるやうになり漸く一つの組織體として考察せられるやうになつて來たのである。然るに明治以來西洋文典の影響を受け、之を助動詞と稱するやうになつたのはよいとしても、更にその範疇づけまで西洋流のものに準ずるやうになり、古來行はれて來たところの、眞に日本語助動詞に卽實せる、所屬活用形を基準とする方法を、全く忘却しないまでも之を二義的に考へるやうになつて來たのである。そこに理と事との卽一を失はざるを得ず、その結果として鄭に言つたやうに、語彙的見地が多分に混入し、謂はゞ遠く歌學的文法の當初へ逆轉してしまつたやうな形となつたのである。然るに山田博士は夙く之を洞察せられ、古來行はれて來た所屬活用形による範疇を復活ぜられたのであるが、今日に至つても未だ尙多くの人々は西洋流の範疇を以て正統的なるものの如く信じ、それを以て助動詞を說いてゐる始末である。

周知の如く、助動詞が動詞語尾に膠着する場合、只勝手次第に何れの活用形にでも附くものでなく、又或一定の活用形にのみ附くものでもなく、それ〴〵所定の活用形に規則正しく附いて行くものである。それは如何なることであるか。勿論場合によつては、音韻上の都合から然せられることもあるのであるが、それは極く少數の例外で、一般的には常に所定の活用形に所定の助動詞が膠着して行くのであるから、それは明かに文法的意味に於ての事實

である。今之を論ずるに當つて、その所屬活用形による類別を先づ掲げて置く。

未然形に膠着する助動詞

「れる」「る」「られる」「らる」「せる」「す」「させる」「さす」「しむ」「ぬ」「ず」「ざり」「ない」「う」「む」「まし」「よう」

連用形に膠着する助動詞

「た」「つ」「ぬ」「たり」「き」「けり」「けむ」「たい」「たし」「ます」

終止形に膠着する助動詞

「なり」「らしい」「べし」「べかり」「らむ」「らし」「めり」「まい」「まじ」

從來、右の中「る」「らる」は受身或は可能、自然、「す」「さす」「しむ」は使役、「ぬ」「ず」「ざり」は打消、「む」「まし」は豫想、「つ」「ぬ」「たり」は完了、「き」「けり」「けむ」は過去、「たし」は希望、「なり」は咏嘆、「べし」「べかり」「らむ」「らし」「めり」「まじ」は推量などと考へ、更に個々のものにつき半ば語彙的な説明を加へ、極めて錯雜した考察を行つて來たのである。尙、相とか態とかといふことも言はれ、前者は日本語特有の動詞性の考察と見ることができるが、後者は西洋文典の時式に倣ふものでその考察は多く意義論的に逸脱してゐる。しかし右の如き從來の考察をそのまゝ押進めて組織立てようとすれば、どうしても意義論的にならざるを得ないのである。かゝる助動詞考察の意義論的駢馳を防遏し、眞に文法的事實に卽一した組織を求めんとするには、右所屬活用形的範類を以てしなければならぬのである。しかし所屬活用形的範類を以てすると言つても、抽象せられた活用形そのも

のを未來とか現在とか過去とかと考へ、かやうな漠然たる直觀の中に之等助動詞を抱擁して行かうとする音義學的考察に對し私はさ程の學的價値を認めることができないのである。要するに、單なる助動詞を語彙的に抽象せる所謂正統派的な考察も、所屬活用形を助動詞から抽離して之を直觀的に考察する音義學派的な考察も、眞に助動詞組織の本體を把握する所以のものではないのである。常に所屬活用形と助動詞との膠着事實そのまゝを具體的に眺めて考察して行かなければならぬ。事實そのまゝの中に理を立て組織を見て行かなければならぬ。

先づ未然形に膠着する助動詞から考察して行く。その中受身可能自然及び使役の如きものを相の助動詞であると謂はれてゐる。かやうなことに就きこゝでは詳細に述べることが出來ないが、要するにそれは客格とか目的格などの必須的補充素と呼應し間接的な動詞的陳述を形成する助動詞である。動詞的陳述を間接的にするといふことは如何なることを言ふか。それは動詞の有する意志性を間接的にすることに外ならない。その中狀態性的なものと發動性的なものがあるのであるが、受身等は前者であり使役は後者である。かやうなものに對して、動詞の意志性の發現が殊更直接的となる性質のものがある。それには更に客觀的なるものと主觀的なるものとある。前者の中現在行はれてゐるものは「ぬ」「ない」「ず」「ざり」の如き打消であるが、古くは繼續を表す「ふ」の如きものもあつた。後者は「う」「よう」「む」「まし」「じ」の如き豫想である。次に連用形に膠着する助動詞は、動詞の有する理智性を發現するためのものである。理智性に就いては種々の方面から種々に考へることができるであらうが、之を動詞の時間性に沿つて言へば、それは現在より過去への方向に働くものであり、更に未來的なものを現實にせんとするものである。前者は廣義の過去で口語の「た」がそれであり、後者は所謂希望の「たい（たし）」である。文語で

は前者が更に、「つ」「ぬ」「たり」の如き現在が完了して行くものと、「き」「けり」の如き眞の過去とが分れて居り、又「けむ」の如き過去を推量するものもある。終止形に膠着する助動詞は動詞の有する感情性を發現するためのものである。勿論感情性と言つても、そこには種々の知性的なもの意志的なものが筋金として通つた感情性であるが、ともかく一旦終止せる陳述から心餘つて流出すると言つた餘情餘感を表すのである。之には「なり」の如き咏嘆と「べし」「べかり」「らむ」「らしい（らし）」「めり」「まい（まじ）」の如き推量とがある。以上の如くであるから、動詞の未然形はその意志性の流出する門であり、連用形はその理智性の流出する門であり、終止形はその感情性の流出する門であるとも考へることができる。斯くてそれ〴〵の助動詞が膠着することによつて、動詞的陳述性が種々に導き出され、そこに複雜微妙な現象性が描かれて行くのである。

以上は成語素としての助動詞をその本質的機能から眺めてみたのであるが、次に助動詞にとつては寧ろ二義的な事柄であるが、之を活用現象の方面から眺めてみよう。それは略〻次の如く區別することができる。

- 助動詞の活用
  - 助動詞特有の活用
  - 陳述語と類似せる活用
    - 形容詞系活用
    - 動詞系活用
      - 一段系活用
        - 一段活用（二段活用）
        - 三段活用
      - 四段系活用
        - 四段的活用
        - 變格活用
          - 良行變格活用
          - （奈行變格活用）

助動詞特有の活用といふのは動詞や形容詞などの如き一般の陳述語と別な活用を有するものである。

未然	連用	終止	連體	已然
	ず	ぬ	ぬ	ね
(ず)	(ず)	(ず)	(ぬ)	(ね)
		(じ)	(じ)	
		う	う	
		よう	よう	
(ませ)		(まし)	(まし)	(ましか)
		(き)	(し)	(しか)
		まい	まい	
		(らし)	(らし)	(らし)

形容詞系活用のものは形容詞と略〻同様な活用を有するものである。

未然	連用	終止	連體	已然
	なく	ない	ない	なけれ
たく	たく(たう)	たい	たい	たけれ
(たく)	(たく)	(たし)	(たき)	(たけれ)

	らしく	らしい	らしい		らしけれ
（べく）	（べく）	（べし）	（べき）		（べけれ）
（まじく）	（まじく）	（まじ）	（まじき）		（まじけれ）

一段系のものの中、口語の一段は文語では二段である。又三段活用は口語の「ます」だけである。

未然	連用	終止	連體	已然	命令
れ	れ	れる	れる	れれ	れ
（れ）	（れ）	（る）	（るる）	（るれ）	（れ）
られ	られ	られる	られる	られれ	られ
（られ）	（られ）	（らる）	（らるる）	（らるれ）	（られ）
せ	せ	せる	せる	せれ	せ
（せ）	（せ）	（す）	（する）	（すれ）	（せ）
させ	させ	させる	させる	させれ	させ
（させ）	（させ）	（さす）	（さする）	（さすれ）	（させ）
（しめ）	（しめ）	（しむ）	（しむる）	（しむれ）	（しめ）
（て）	（て）	（つ）	（つる）	（つれ）	（て）
ませ	まし	ます	ますする	ますれ	ませ

四段的活用のものは語尾變化が極めて不完全であるが、ともかく四段活用の面影を有するものである。

終止	連體	已然
(む)	(む)	(め)
(らむ)	(らむ)	(らめ)
(けむ)	(けむ)	(けめ)

奈行變格活用のものは次の一語である。

未然	連用	終止	連體	已然	命令
(な)	(に)	(ぬ)	(ぬる)	(ぬれ)	(ね)

良行變格のものは略〻文語の存在動詞又は形式動詞の活用と同樣な語尾變化をなすもので、之に屬するものは次の如くである。

未然	連用	終止	連體	已然	命令
(ざら)	(ざり)	(ざり)	(ざる)	(ざれ)	(ざれ)
たら	たり	た	た	たれ	
(たら)	(たり)	(たり)	(たる)	(たれ)	
(けら)	(けり)	(けり)	(ける)	(けれ)	
		(なり)	(なる)	(なれ)	

（べから）　（べかり）　（べかり）　（べかる）　（べかれ）
（めり）　（めり）　（める）　（めれ）
（まじから）（まじかり）（まじかり）（まじかる）（まじかれ）

以上の中、「ない」「たい（たし）」「らしい」「べし」「まじ」などの如き形容詞系のものや、「まし」「らし」「じ」「まい」などの如き助動詞特有のものは、陳述作用の性質が形容詞のそれに似て靜的單一的であり、それ以外の「れる（る）」「られる（らる）」「せる（す）」「させる（さす）」「しむ」「つ」「ます」「む」「らむ」「ぬ」「ざり」「た（たり）」「けり」「なり」「べかり」「めり」「まじかり」などの如き動詞系のものや、「ぬ」「ず」「う」「よう」「き」などの如き助動詞特有のものは、動詞のそれに似て動的複雜的である　隨つて前者にはそれ以上絶對に他の助動詞がつゞかないのであるが、後者には形の不完全な四段的のものや助動詞特有のものなどは別として、一般的には更に他の助動詞がつゞくことができるのである。

三

未然形に膠着する助動詞は、動詞的陳述の意志性を種々に發現するものであるが、その中、動詞的陳述の意志性を最も顯著に動すものは、それを間接的ならしめるものでなければならない。動詞の陳述は本動詞のまゝでは普通にその意志作用が直接的であり、之が然るべき助動詞をとることによつて間接的な意志性に變曲されるのであるが、かやうな間接表現の助動詞の膠着は動詞的陳述の意志性にとつて最も大きな變動でなければならぬ。之以上に進め

ば、その意志性を失はなければならぬ程のものである。しかして之には、その動きが消極的方向であり、狀態性的陳述となるものと、その動きが積極的方向であり、發動性的陳述となるものとある。今前者を被動と稱し、後者を使動と稱する。

被動の助動詞は一般に次の如きものである。

接續＼活用形	未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段系に	れ（れ）	れ（れ）	れる（る）	れる（るる）	れれ（るれ）	れ（れ）
一段系に	られ（られ）	られ（られ）	られる（らる）	られる（らるる）	られれ（らるれ）	られ（られ）

被動には二種類がある。即ち「他に然せらるる」ものと「おのづから然せらるる」ものとである。前者は

金は取られなかつたやうだ。

報いられない人生である。

色々聞かれたが何も言はなかつた。

とうとうあいつに見られてしまつた。
賊に金を盗まれる。
校長に褒められる。
問ふよりも問はれる方が樂だ。
強い力で投げつけられる程強い勢ではねかへります。
叱られればそれまでだ。
うそにでも賞められれば嬉しい。
ぐづ〳〵して居てまたやられよ
そこに置いて又女中に捨てられよ。
人に問はるゝ時いかゞ答へむ。
われ大切の本を蟲に食はれたり。
自ら信ずるものは毀らるれども怒らず。
徵せられて士班に列せらる。

の如く、「何が」といふ主體的なものに對する「何に」といふ客體的なものが明瞭に存立すべき性質の、所謂受身である。後者は

容易に行はれない。

未だ實現せられずに終つてしまつた。

近年は斬髪の風が行はれて冠禮は段々すたれて行く。

橋が架けられ道路が改修せられ村は日一日と榮えて行く。

竹の無いところへ行くと今更のやうに竹の効用の廣いのに驚かれる。

行末が案じられる。

箱の蓋が取られるが早いか何百何千と數知れぬ小人の兵隊が飛出した。

弔辭が讀始められるとざわめきがさつと止んだ。

幕が切つて下されればもう事がおしまひである。

この案さへ實行せられれば思ひ殘すことは更にない。

眺められるゝは故郷の空なり。

老いぬれば同じことこそせられけれ君は千代ませ君は千代ませ。

なほこそ國の方は見やられ。

の如く、主體的なものに對する客體的なものが漠然として顯現しない成行的な性質の、所謂自然である。

受身は主客が相互に對立的で、而も主が客に然せられるものであり、自然はかゝる受身を更に進め、主が客に包含せられる狀態に於て主が客に然せられる意味のものである。かゝる主客の對立的意味の全然ないものに可能と敬意とがある。それは謂はゞ主客の一致である。受身から自然への方向と反對に、受身から使動への方向へ進み、そ

の中道に於て客が主の裡に一致合同せるものが可能であり、受身から自然への方向を進み、その中道に於て主が客の裡に一致合同せるものが敬意である。故に可能は

そんなことは請負はれぬ。

これなら着られよう。

そんなことが言はれて。

おれの言ふことに答へられたら何でもやらう。

世界生活に就いても亦この事がいはれる。

月明にも水底の砂が分明に數へられる。

そんな事が言はれる義理か。

これに答へられる人が居ますか。

五時に起きられればよいが。

讀まれればそれに越したことがない。

その面白さ筆紙に盡されず。

我もこの問題には答へらる。

の如く、客體的なものが主體的なものに領せられそれが客體となつて叙述面に現れてゐないのである。又敬意はそんなことは問はれなかつた。

とうとう來られなかつた。
私の話を聞かれて大變驚かれました。
篤胤大人は翁の歿後の門人で生前に敎を受けられた事はない。
いやだと言はれるかも知れぬ。
もう起きられる。
京都へ出て二三日見物して歸られるさうです。
あの方が來られる日に限つて雨が降る。
出掛けられゝばよかつたのに。
あなたがお出で下されゝば一層活氣がつきます。
方々まづ靜まられよ。
ともかくも試みられよ。
生きては王事に勤勞せられ、死にては國家の鎭護となられしなどその功績のほど何にかたとへむ。
君はこの書を讀まれたるか。
御氣嫌よく入らせらる。

の如く、主體的なものが客體的なものに領せられ、それが主格となつて叙述面に現れてゐないのである。

右の中、可能は本動詞が四段系の場合に限り次の如く一段に轉活した形で表すことがある。

書けない。　書けた。　書ける。　書ける方。　書ければよい。

勝てぬ。　勝てます。　勝てる。　勝てる自信。　勝てれば結構だ。

死ねまい。　死ねても。　死ねる。　死ねる幸。　死ねれば苦痛がない。

又萬葉時代頃までは「ゆ」（四段系所接）「らゆ」（一段系所接）があつて

か行けば人にいとはえかく行けば人に憎まえ……

心ゆも思はぬ人の衣にすらゆな。

瓜はめば子供思ほゆ栗はめばまして忍ばゆ。

はろばろに思はゆるかも。

見るに知らえぬうま人の子と。

妹を思ひいの寢らえぬに

の如く敬意以外のものに行はれてゐた。

使動の助動詞は一般に次の如きものである。

活用形＼所接	未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段系に	せ（せ）	せ（せ）	せる（す）	せる（する）	せれ（すれ）	せ（せ）

一段系に	させ（させ）	させ（させ）	させる（させる）	させる（させる）	させれ（させれ）	させ（させ）
四段系一段に	（しめ）	（しめ）	（しむ）	（しむる）	（しむれ）	（しめ）

しかして之は主として主體的なものが客體的なものを使役して、自家の欲する動作作用を行はしめるものである。

例へば

さうは言はせぬ。

今年は受けさせぬ積りです。

茶屋に腰うちかけてラムネを抜かせ榮螺をやかせる。

後で植ゑさせて置きませう。

無理に藥を飲ませる。

みんな捨てさせる。

あれはいつも人に不安の感じを抱かせる男だ。

換へさせる方がいゝやうですよ。

歸らせれば心配がなかつたかも知れぬ。

捨てさせればよかつた。
下女を使に走らす。
つかさを得さすとも兄にはまさらむ。
旗の青きは浪の和ぎたるを知らするなり。
これを憐みて金を償ひ歸參することを得しむ。
その幅狹く大船を出入せしむるに足らず。

の如きものである。この使動陳述は本動詞の性質によつて、或場合には「他を然さする」形のものとなり、或場合には「他に然さする」形のものとなる。例へば

馬を走らせる。　花を咲かせる。

の如きものは前者であり

大工に家を建てさせる。　犬に橇を引かせる。
從者をして村人に道を尋ねさせる。

の如きものは後者である。しかし、何れにしても使動である點に於ては變りはないのである。かゝる使動は、被動の自然と對蹠的なものであると言ふことができる。自然は嚮にも言つたやうに主體的なものが客體的なものに全く包含せられたものであり、主が客のまゝに動き行く底のものである。然るに使動は客が主に全く包含せられ、その意のまゝに動き行く性質のものである。

文語ではこの種の助動詞が敬意に使用せられることがある。例へば

天皇御歳五十二にして御即位の禮を行はせらる。

攝政宮親しく御野立所に立たせ給ふ。

からくおぼし歎きてやがて山崎にて出家せしめ給へり。

正午近き頃かねて行在所と定めさせられたる中宮祠の社務所に著かせたまひぬ。

の如きものである。又上代では

わがせこは鵜川たゝさね。（萬葉・十九ノ四一九）

賢し女をありと聞かして麗し女をありと聞こして（記・上）

吾背子は借廬作らす。（萬葉・一ノ十一）

鮎釣ると立たせる妹（同・五ノ八五五）

の如き敬意の助動詞が特別にあつて、同じくS系統の形質であるが四段活用であり、且所接は一般に四段系のものに限られてゐたやうである。しかし之も元を正せば現在成語となつてゐる

明す　落す　起す　逃す　交す　廻す　焦す　照す

動かす　驚かす　轟かす　乾かす　惱ます　勵ます　響ます　惑はす

綻ばす　潤ほす　滅ぼす　費やす　癒やす　燻らす　鳴らす

などの如き他動詞を形成したS形質と同一のものであらう。しかして、かゝる他動詞も現在の目から見れば單なる

一成語であるが、それらの形成過程にあつては、恐らく動詞未然形に、四段に變化する使動的述素の膠着した姿のものであつたであらう。かくて二段から一段へ轉活してゐる「せる（す）」「させる（さす）」なども更に溯つて見たら、上に掲げた敬意助動詞「す」や佐行四段の他動詞語尾と全く同一系統のものであつて、一方はとうに化石語片となつてしまつたにも拘はらず、之だけが新時代のものに順應してどん〳〵進化して行つたものと思はれる。平安朝時代以後に於ても

木の葉をも宿にふかさね秋風の（宇津保）

さらずばおほんふみもならはし奉らむ。（同）

心ざまさとくて琴などもならはす人あらば（落窪）

箏心に入れたりとてこれならはせと北の方へのたまへば（同）

の如く四段として用ひられてあるものもあり、又現代方言の中でも

食はさう　食はして　食はす

などと四段的に言ふものもある。之等は謂はゞ進化の篩から洩れて出た粃糠でもあらうか。又被動の「れる（る）」「られる（らる）」などにしても

明る　興る　劣る　變る　脱る　廻る　焦る　分かる　助かる　尖がる　塞がる

下がる　廣がる　重なる　加はる　擔はる　終る　集る　改まる　極まる

の如きものなどから察すると、矢張元は四段であつたのであらう。

口語の「爲る」は右の被動使動兩助動詞に對して左の三樣の姿をとる。

四段系的（される・させる）
一段系的
　三段的（せられる・せさせる）
　二段的（しられる・しさせる）

この中四段系的なものの使動「させる」は

いざさせ給へみむとのたまはすれば（和泉式部日記）

たゞ袖をとらへてとうざいをさせずこひとりもてこずば（枕）

佛をむかへて說法をさせまゐらすべきよし仰せありければ（寶物集）

觀音寺にのぼせてがくもんさせて（義經記）

の如く平安朝以來のものである。

以上のものの外の助動詞は總て直接的なものとも考へることができる。「れる（る）」「られる（らる）」や「せる（す）」「させる（さす）」「しむ」などを間接的表現の助動詞とすれば、その他のものは皆直接的表現の助動詞である。しかし、尙未然形に膠着するものは動詞的陳述の意志性に關係あるものである。勿論それは、被動や使動の如くその意志性に革命的な變動を與へるものではない。直接を間接にする如きものではない。卽ち意志性を直接的なるまゝ延展し、それを特殊な直接的意志性表現に導く性質のものである。白を黑にするのではなく、白は白のまゝで之に種々の形象を與へて行く如き意味のものである。それらの中、客觀的なものと主觀的なものとある。客觀的

なものの中で最も普通に行はれるものは打消であり、主觀的なものは豫想である。

打消に用ひる助動詞は大略左の如きものである。

未然	連用	終止	連體	已然	命令
(ず)	ず (ず)	ぬ (ず)	ぬ (ぬ)	ね (ね)	
(ざら)	(ざり)	(ざり)	(ざる)	(ざれ)	(ざれ)
	なく	ない	ない	なけれ	

右の中「ぬ」は

讀みもせず書けもせぬ。

一向知らぬ人が呼びました。

勉强もせねば運動もしない。

の如く用ひる。文語の方は終止形が「ず」となつて居り、その上未然形が備つてゐる。例へば

今にして改めずんば後悔ゆとも甲斐あるまじ。

爭を好むは勇にあらず眞の大勇は人とものを爭はぬものなり。

逢はずしてこよひあけなば

掬ぶ手の雫ににごる山の井のあかでも人にわかれけるかな。（「ずして」――「ずて」――「で」）

さらねども難波の春はあやしきに（俊成五社百首）

の如きものである。この「ず」に存在動詞「あり」が融合した形のものが「ざり」で、六活用形總てを備へて居る。例へば

逢ふことの絶えてしなくばなかなかに人をも身をも恨みざらまし。

知らずして行はざりしなり。

朱雀院は御子連歌はしまさざり。（榮華・月の宴）

人物の出でざる蓋し怪しむに足らざるなり。

名相同じからざれども事はすなはち一なり。

汚名を後に殘さざれ。

「ない」は「ぬ」と同樣未然命令以外の四活用形が活動してゐる。例へば

日が暮れて何も見えなくなつた。

私にはそれがわからない。

知らないことを知つた風をしないがよい。

今日是非これをやり遂げなければならぬ。

又この「ない」のカリ活的用法のものに

夏になつても多分草は生えなからう。

天は尙未だ予を棄てなかつた。

の如き「なからう」「なかつた」があり、

どうしても出來なんだ。

の如き「なんだ」は「なかつた」の轉形である。又この「ない」とさきの「ぬ」とは一般にその未然を使用しないものであるが稀に

行かずばなるまい。

來なくば呼びにやれ。

の如き言ひ方をすることもある。

以上の外に上代では

妹が見しあふちの花は散りぬべし吾が泣く涙未だ乾なくに。（萬葉・五ノ七九八）

怪しき心を吾がもはなくに。（同・十五ノ三五八八）

來鳴かなくそこは怨みず然れども谷片つきて家居れる君が聞きつゝ告げなくもうし。（同・十九ノ四二〇七）

の如き「なく」、又東歌では

會津嶺の國をさ遠みあはなはば（萬葉・十四ノ三四二六）

忘ら來ばこそ汝をかけなはめ。（同・三三九四）

對島の嶺は下雲あらなふ。（同・三五一六）

立別れ去にし宵よりせろにあはなふよ。（同・三三七五）

晝とけば解けなへ紐（同・三四八三）

をさをさも寢なへ兒故に（同・三五二九）

の如き「なは」（未然）「なふ」（終止）「なへ」（連體）、或は又

出でましの悔はあらにぞ出でませ子（天智紀）

春されば吾家の里の川とには年魚兒さ走る君待ちがてに。（萬葉・五ノ八五九）

嘆けどもせむすべしらに戀ふれどもあふよしを無み（同・二ノ二一〇）

見つれどもそこも飽かにと（同・十七ノ三九九一）

の如き「に」がある。かくて「なく」「なふ」或は口語の「ない」の「な」は未然形的のものと考へられ、「に」は連用形的のものとすべきであるから、「ぬ」「ね」と併せて次の如き系統を立てることができる。

なく

な　なふ（なば・なふ・なへ）　に　ぬ　ね

ない（なく・ない・なけれ）

又「ざり」はさきにも言つたやうに「ず」に存在動詞「あり」を融合せしめた形のものであり（正しくは「ざ」に「り」の添着せるもの）、更に打消豫想とも言ふべき「じ」を併せて、右n系統のものに對して

ざ（ざら・ざり・ざる・ざれ）　じ　ず

のZ系のものを立てることができる。つまり日本語の打消助動詞はn又はz音片が基調となつてゐるのである。

動詞的陳述の意志性を客觀的に表現するものの中、右打消の外に、上代では鹿持雅澄の所謂「のど〳〵しき」陳述性、即ち現象の繼續性を言ひ表す「ふ」があつた。それは四段活用のものにのみ添接せられるものであるが、その中

隱はぬ赤き心を（萬葉・二十ノ四四六五）

天地とともに久しく住まはむと（同・四ノ五七八）

堅鹽を取りつゞしろひ糟湯酒打ちすゝろひ（同・五ノ八九二）

鳴鳥の二人並びゐ語ひし（同・七九四）

もみぢ葉の散らふ山邊（同・十五ノ三七〇四）

雲だにも情あらなむ隱さふべしや（同・一ノ一八）

愛しくしが語らへば（同・五ノ九〇四）

の如き四段活用をなすもの、更に

流らへ散るは何の花ぞも。（同・八ノ一四二〇）

秀つ枝のうらばは中つ枝に落ちふらばへ中つ枝のうらばは下つ枝に落ちふらばへ（雄略記）

の如き下二段的のものもある。又「ふ」の繼續的なるに反し、意志性を閉止し之を一點に定着せしめる「く」の如きものも行はれてゐた。之は現在「曰く」「思はく」などの語中に殘存してゐるものであるが、古くは

み吉野の玉松が枝は愛しきかも君がみ言を持ちて通はく。（萬葉・二ノ一一三）

吾がここだしぬはく知らに（同・十九ノ四一九五）

梅の花夢に語らくみやびたる花とあれ思ふ酒にうかべこそ。（同・五ノ八五二）

君が日にけに老ゆらく惜しも。（同・十三ノ三二四六）

寧樂の都の荒らく惜しも。（同・八ノ一六〇四）

見らく少く戀らくの多き。（同・七ノ一三九四）

の如く盛に活動してゐたのである。かやうな繼續と閉止とは肯定的なものとして、打消的なものに對立すべきものである。

豫想といふのは、未だ實現しない未來的のものに對し、豫め想定決意を行ふものである。之には單に肯定的なるものと、打消の混入せるものとあり、前者は更に豫定的なものと假定的なものとに分れる。豫定的なものに用ひる助動詞は次の如きものである。

活用形／所接	終止	連體	已然
四段に系	う	う	
一段に系	よう	よう	
四段に一段兩系	（む）	（む）	（め）

「う」の用例

面白い事があらう。

善からうが惡からうが存分やつて見ろ。

さあ行かう。

行かうか歸らうかと考へてゐる所である。

「よう」の用例

今年こそは澤山取れよう。

あの人に出來よう筈はない。

行つて來よう。

しようがしなからうが勝手だ。

「む」の用例

風吹き雨降らむ。

かぎりあらむ道にも後れ先立たじ。

花の木にあらざらめども咲きにけり。

よしさらば余は君が保護者たらむ。

兄の子に家を讓らむ志この時より起させたまへり。

山吹の立ちよそへたる山清水汲みに行かめど道の知らなく。

尙萬葉時代では

あひ思はぬ人をやもとな白妙の袖漬づまでにねのみし泣かも。（萬葉・四ノ六一四）

我がもての忘れもしだは（同・二十ノ四三六七

の如く「む」の外に「も」が用ひられることがあつた。假定的なものに用ひる助動詞は文語の「まし」である。即ちそれは

未然	終止	連體	已然
（ませ）	まし）	（まし）	（ましか）

の如く活用し

ぬば玉の夜渡る月にあらませば家なる妹に逢ひて來ましを。（萬葉・十五ノ三六七一）

世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし。（古今・一）

この人年つもるまであらましかばげにいかばかり目に見えぬ鬼神をも動かしなましに早くて失せにしいといとほしくあたらしうなむ。（增鏡・おどろの下）

これに何をかかまし。（枕）

ねたくも言はざらましものをとくやしがる。（土佐）

年くれぬとばかりこそはきかましかわが身の上につもらざりせば。（金葉・四）

の如く行はれてゐる。打消的な豫想を表す助動詞は文語の「じ」である。

終止	連體
じ	じ

その用例は次の如くである。

世にいさゝかも人の心をまげたることはあらじとおもふを（源氏・桐壺）

幾世しもあらじ我身をなぞもかく（古今・十六）

おのがじし塵もつかじと身をもてなし（源氏・帚木）

白川の瀧の糸みまほしけれどみだりに人をよせじものをや。（後撰・十五）

以上豫想表現の助動詞中、「う」「よう」は「む――ん――う――（よう）」の如く變形して來たものであり、「まし」は

かけまくのゆゆしかしこし（萬葉・十九ノ四二四五）

かけまくはあやにかしこし（同・五ノ八一三）

梅の花散らまく惜しみ（同・五ノ八二四）

今日もかも京師なりせば見まく欲り（同・十五ノ三七七六）

などの「まく」と同樣、「む」の未然的變化形「ま」に形容詞系の語片が膠着融合したものであり、何れも「む」の一元に歸せしめて考へることができる。又この「まく」は

うつらうつら見まくのほしき君にもあるかも（萬葉・二十ノ四四四九）

深海松の見まくほしけど（同・六ノ九四六）

明日さへ見まくほしき君かも。（同・六ノ一〇一四）

栲領巾の懸けまくほしき妹の名を（同・三ノ二八六）

の如く、形容詞「欲し」に連ねたものが次第に慣熟し、遂に

行く方もなくせかれたる山水の言はまほしくもおもほゆるかな。（後撰・二）

散り散らず聞かまほしきを故郷の花見て歸る人も逢はなむ。（拾遺・一）

落ち行けば命ばかりはいきの守みのをはりこそ聞かまほしけれ。（平治）

の如く「まほし」といふ希望表現の助動詞様のものを形成するに至つた。又

ことごとは死ななと思へど（萬葉・五ノ八九七）

ぬばたまの夜明しも船は榜ぎ行かな。（同・十五ノ三七二一）

雲だにも情あらなも隠さふべしや。（同・一ノ一八）

兒等は逢はなもひとりのみして。（同・十四ノ三四〇五）

山のは逃げて入れずもあらなむ。（伊勢）

いづれか花と春に問はなむ。（新古今・一）

の如き「な」「なむ」「なも」は、一種の希望表現の助動詞のやうに見えるが、それは陳述の係として用ひられるものと同一語形であり、又「なも」「なむ」と語形が變轉しても機能には別段の影響なく、更に終止的のものとしてのみ用ひられてゐる等の點から考へて、尚助動詞としないで係の助詞の終止的用法として行きたい。

四

連用形に膠着する助動詞は一般に動詞的陳述の理智性を開示するものであるが、その中、最も之が性能の顯著なるものは現實を完了せしめ過去に編入し、或はかゝる過去を回想する性質のものでなければならぬ。之等は極く概略的に言ふならば一般的に過去の助動詞とも稱すべきものであるが、併しそれは過去そのものを寫すのではなく、

現實の一點より之を過去に編入し或はかゝる過去を再起せしめる意味のものである。前者は知覺的であり、後者は記憶的である。眞に客觀的時式としての現在とか過去とかといふものではなく、どこまでも現實に立脚し種々の過去へ干與して行く主觀的時性としてのものである。現實點より過去に送り込み、過去を引戻す意味に於ての過去である。それは現在の過去である。理智が對象とする過去ではなく、かゝる過去を對象とする理智そのものの形相である。理智的活動の究極的形式である。

右の如き意味に於ける過去の助動詞は略〻次の如きものである。

未然	連用	終止	連體	已然	命令
たら	たり	た	た	たれ	
(たら)	(たり)	(たり)	(たる)	(たれ)	
(て)	て	(つ)	(つる)	(つれ)	(て)
(な)	(に)	(ぬ)	(ぬる)	(ぬれ)	(ね)
		(き)	(し)	(しか)	
(けら)	(けり)	(けり)	(ける)	(けれ)	
		(けむ)	(けむ)	(けめ)	

右の中「た」は現在完了にも過去回想にも用ひられるものである。例へば

見たら見たといふさ。
書いたらば渡しなさい。
立つたり坐つたりする。
飛んだり跳ねたりする。
もう出來上りました。
ちよつと待つた。
ねぢけた心で何をしても駄目だ。

の如きものは知覺的確認的な現在完了であり

昨日雨が降つた。
五年前に東京へ來た。
樂しかつた少年時代。
昨日行つたれば居なかつた。

の如きものは記憶的再認的な過去回想である。「た」は口語であるが、文語では可成複雜詳細に分化してゐる。即ち先づ現在完了のものと過去回想のものとが相分れてゐる。しかして、現在完了の助動詞には觀想的な「ぬ」と直寫的な「つ」「たり」がある。「ぬ」は

われのみや世をうぐひすと鳴きわびむ人の心の花とちりなば。（古今・十五）

ふるさととなりにし奈良の都にも色はかはらず花はさきけり。（古今・二）

春の野にわかなつまむとこしものをちりかふ花に道はまどひぬ。（古今・二）

のどかに物語してかへりぬるいとよし。（徒然）

老いぬればさらぬ別のありといへばいよいよ見まくほしき君かな。（古今・十七）

玉の緒よたえなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする。

の如く、常に知覺の內面的觀想的な成立を寫すのである。かゝる「ぬ」の未然形「な」に豫想の「む」が添接したものが

かたちこそみ山がくれの朽木なれこゝろは花になさばなりなむ。（古今・十七）

いづかたにゆきかくれなむ世の中に身のあればこそ人もつらけれ。（拾遺・十五）

よの中のうきたびごとに身をなげば深き谷こそ淺くなりなめ（古今・十九）

の如き、連用形につく想像の「なむ」である。これと未然形に添へ希望を表す助詞「なむ」と混同してはならぬ。即ちこの連用形所接の「なむ」は四段系的な活用を有し、隨つてそれ自身種々の斷續法を內生せしめることができるのであるが、未然形に添へる「なむ」はそれが全く不可能である。

「つ」は「ぬ」と異なり、知覺の外面的直觀的成立を寫すものである。例へば

梅が香を袖にうつして留めてば春は過ぐともかたみならまし。（古今・二）

をしのねのいたく鳴くなる朝ぼらけ池は氷にとぢてけらしも。（兼盛集）

夕陽西山に沒して四顧冥々たり。

我が心なぐさめかねつ更科や姥捨山に照る月を見て。（古今・十七）

時鳥鳴きつる方を眺むればただ有明の月ぞ殘れる。

子ごとの子の日は多く過ぎつれどかゝる二葉の松は見ざりつ。（後拾遺）

久方の天の河原のわたし守君渡りなばかぢかくしてよ。（古今・四）

右の中連用形の「て」の用法は極めて廣く、それらは多く本來の完了的意味が磨滅し形式化し、單に決定的な意味で用ひられてゐるのである。例へば動詞ばかりではなく

柄は短くても可なり。

花は紅にて葉は綠なり。

人知るまじとて欺くは妄なり。

の如く形容詞や助詞の下にさへ用ひられる。之は勿論陳述語の省略體ではあるが、口語でもこの「て」だけが抽象され、盛に行はれてゐるのである。例へば

大きな虎が出て來てあれまはります。

讀んでも讀んでも分らぬ。

夜は川下の方へ流れて曙の光は四邊に滿ちてゐる。

倫敦の冬は短くて霧が多くて誠に鬱陶しうございます。

實戰に役に立たなくては何にもならぬ。

見たくて見たくてたまらぬ。

の如きものであるが、かやうな「て」はも早連用的並列の助詞と見て行かなければならぬのである。

「つ」に存在動詞「あり」の融合した形のものは（正しくは「た」に「り」を添へたもの）「たり」で、口語の「た」の原形である。一般に現在完了として用ひられるのであるが、尙多少の存續的な意味をも具有してゐるところから、過去を回想する意味にも用ひられることがある。

過を知りたらばそを補はむとつとむべし。

待ちやすきものにおぼしたりきかし。（源氏・朝顏）

過ぎたるは及ばざるがごとし。

師に就きて學問したり。

花は見頃は過ぎたれどもなほ七分の匂あり。

隨身一人二人おほせおきたれとのたまふ。（源氏・若紫）

この「たり」が「た」といふ形になつたのは平安末期頃からであらう。例へば

時きぬとふる里さしてかへる雁こぞきた道へまた向ふなり。（爲忠集）

など懸詞ではあるが、かく歌語にさへ入込んでゐるのである。後俗語が記錄せられる機會が多くなつてからは

根井又立出テ使ノ雜色ニ猫殿ノ參リタトハ何事ソト云（平家）

木曾意得ズトテナマリ音ニテ何猫ノキタ猫トハ何ゾ鼠トル猫カ（源平盛衰記）

命にもかへて惜しかつた馬を（天草本平家）

晦菴ハ、十六七テサトリエタソ（莊子抄・一ノ七）

學文ズキデスグレタ才ガアルソ（蒙求抄・五ノ十二）

などと、盛に「た」が文獻面に露出して來た。

過去回想の助動詞中、最も純粹なものは「き」である。例へば

風にしも何かまかせむ櫻花にほひあかぬに散るはうかりき。（後撰・三）

なるとよりさし出されし船よりも吾ぞよるべもなきこゝちせし。（同・十）

貧窮甚しかりしかば上方に往きて身を立てむと思ひき。

戀すてふ吾が名はまだき立ちにけり人しれずこそ思ひそめしか。（拾遺・十一）

の如きものである。この「き」は三段活用のものに對しては次の如き異なつた習慣がある。

加行三段
- 未然形（こ）
  - き（用ヒナイ）
  - し（くらべこし振分髪も肩すぎぬ）
  - しか（人ふるす里をいとひてこしかども）
- 連用形（き）
  - き（用ヒナイ）
  - し（きし方行末思ひつゞけられて）
  - しか（はるばると父を尋ねてきしかども）

佐行三段
- 未然形（せ）
  - き（用ヒナイ）
  - し（我の敵視せしは誤なり）
  - しか（やがてさぶらはせむとせしかど）
- 連用形（し）
  - き（鬼のやうなるもの出で來て殺さむとしき）
  - し（用ヒナイ）
  - しか（用ヒナイ）

この佐行三段の「せし」「せしか」に類推して佐行四段のものをも「なせし」「犯せし」「過せしかば」などと言ふ場合がある。又この助動詞は音質から言ふとK系統のものとS系統のものと二つがあるが、K系統のもので古くはつぎねふ山城女のこくはもちうちし大根根白の白たゞむき麻迦受祁婆許曾知らずとも言はめ。（記・下）の如き「け」があり、S系統のものでは

かみなづき雨間もおかず零りにせば誰が里の間に宿か借らまし。（萬葉・十二ノ三二一四）

筑波嶺に吾が行けりせば時鳥山彦とよめ鳴かましやそれ。（萬葉・八ノ一四九七）

の如き「せ」がある。

右の「け」の如きものに「り」が添へられたものが「けり」であり、この「けり」は多少持續的な回想的陳述を表すのである。例へば

野の上のうはぎ過ぎにけらずや。　萬葉・二ノ二二一）

ふるさととなりにし奈良の都にも色はかはらず花は咲きけり。（古今・二）

之を傳へきける將士皆王の赤心と大膽さとに驚けり。

秋をおきて時こそありけれ菊の花うつろふからに色のまされば。　古今・五）

の如きものである。又「け」に「む」の合融したものは「けむ」で、之は回想より一歩進んで過去事實に對し想像をめぐらすものである。例へば

涙川なに水上をたづねけむ物思ふ時のわが身なりけり。（古今・十一）

古にありけむ人の倭人幡の帶解き交へてふせ屋たて妻問ひしけむ葛飾の眞間の手兒名が（萬葉・三ノ四三一）

から衣たつををしみし心こそ二むら山の關となりけめ。（後撰・十一）

の如きものである。

以上は現在より過去へ往來する理智性の發現を表すものであるが、次に現在點より未來的なものを引寄せんとする理智性の發現を表すものとして希望がある。希望助動詞としては、嚮に述べた「な」と「む」の合融體なる動詞系の「なむ」もあるが、原本的のものとしては形容詞系の「たい（たし）」がある。即ち

未然	連用	終止	連體	已然
たく（たう）	たい	たい	たける	
（たく）	（たし）	（たき）	（たけれ）	

の如き形態を有し、それは口語では

見たくてならぬ。

拝見したう存じます。

是非お出でを願ひたい。

行きたい時に行く。

見たければ見てもよい。

の如く用ひられ、文語では

此の舟にうちのせ奉りてのぼりたくは候へども（平家・三）

きゝたしや宿をたどりてなくなみだわすれ水とや流れゆくらむ。（月詣集）

いざいかにみ山の奥にしをれても心知りたき秋の夜の月。（千五百番歌合）

かやうの物こそ一人なりとも召つかひたけれ（曾我）

の如く用ひられる。この「たい（たし）」は過去性の根「た」に形容詞的形質の添接せるもので、動詞的形質の添接せる「たり」に對立すべきものである。

連用形に添へられる助動詞として、以上の外に次の如き「ます」がある。

未然	連用	終止	連體	已然	命令
ませ	まし	ます	ます(る)	ますれ	ませ

之は

どうすれば文がうまくなりませうか。

よくお留守居をしましたかね。

僕はこれでお暇致します。

私は遠山と申しますものでございます。

私も左様に存じまするが。

私がまゐりますればきつと内に居ないと申します。

ではさうなさいませ。

の如く口語にのみ行はれ、陳述を丁寧にするために添接せられるものである。しかし之は「申す」といふ動詞の形式化せるもので正しい意味での助動詞ではない。

五

終止形に膠着する助動詞は一般に動詞的陳述の感情性を流出せしめる意味のものである。その中、先づ純粋に感

情性を開發する咏嘆と、何等かの理智的なもの乃至は意志的なものに形造られることによつて、その感情性を吐露する推量とがある。後者は更に單なる肯定的推量と打消的推量とに分れる。先づ咏嘆の助動詞と目せられるものは次の一語である。

終止	連體	已然
（なり）	（なる）	（なれ）

しかして之は

豐葦原の中つ國はいたくさやぎてありなり。

丈夫の鞆の音すなり。

秋の野に人まつ蟲の聲すなり。

しら山に年ふる雪やまさるらむよはにかたしくたもとさゆなり。

皆人は花の衣になりぬなり。

うきよかないかにならましすゞむしのたのむ山路にこゑたてつなり。

かぐや姫のむかへにまうでくなる。

みちのくにありといふなる名取川。

いひさしてとゞめらるなる池水のみないづかたにおもひよるらむ。（後撰）

しどろに聲の聞ゆなるかな。（山家集）

用意ことにしてさる心ばえ見すなれど

山の端に味鳧群騒ぎゆくなれど

寢よとの鐘は打つなれど

の如く文語にのみ用ひられる。

單に推量することを表す助動詞は略〻次の如きものである。

未然	連用	終止	連體	已然
	らしく	らしい	らしい	らしけれ
	（めり）	（らし）	（らし）	（らし）
		（めり）	（める）	（めれ）
（べく）	（べく）	（べし）	（べき）	（べけれ）
（べから）	（べかり）	（べかり）	（べかる）	（べかれ）
		（らむ）	（らむ）	（らめ）

右の中で、「らしい」は現實に就いて多少傍觀的に推量する助動詞である。例へば

何だか一茶までが痩せた人でもあるらしく思はれる。

白の方が勝つらしい。

何でも隨分こまつてゐるらしい様子だつた。

お前の境遇に同情してゐるらしければうんと口説いてやれ。

兄上も大聲で何か言つてゐるらしかつた。

の如きものである。之に當る文語の「らし」は

この河にもみぢば流るおく山の雪げの水ぞいまさるらし。（古今・六）

しのびて心を交はせる人ぞありけらし。（源氏・帚木）

松のねに風のしらべをまかせては立田姫こそ秋はひくらし。（後撰・五）

の如きものである。しかし古くは之に

古も然なれこそうつせみも妻を爭ふらしき。（萬葉・一ノ一三）

の如きものもあつたのである。「らし」は現實に對してその推量が皮相的であるが、「めり」は皮膜を通してその實相を推定せんとするものである。例へば

人げなき恥を隱しつゝ交らひ給ふめりつるを（源氏・帚木）

立田川紅葉亂れて流るめり。（古今・五）

口にいとうたのまるゝなめりとぞ見えたるすぢに侍るかし。（紫式部日記）

鶯の笠に縫ふてふ梅の花濡るめる人に着せてかへさむ。

頼む人露草ごとに見ゆめればきえかへりつゝ歎かるゝなり。（提中納言）

の如きものである。故に之は卽實的推量などとも稱すべきものである。

「らしい（らし）」「めり」は何れも一般に現實的な推量であるが、之に對し「べし」「べかり」「らむ」は未來的な推量であるといふことができる。その中、「べし」「べかり」は未來的なものに對し信念を以て推定斷言を下すもので、當爲的推量とも稱すべきものであり、「らむ」は信念なき未來の推量であり、疑惑的推量とも稱すべきものである。

「べし」には單に未來的な事實を推量する場合と、事の可能なることを推定する場合と、更に進んで適當乃至は義務を言明する場合との大體三種の用法がある。先づ單に未來的事實を推量するものは

飛ぶ鶯の上まで往ぬべくは秋風ふくと雁につげこせ。

くるまよりおちぬべうまどひ給へば……

古寺の庭に紅つやゝかなるは若楓なるべし。

我が宿の花見がてらにくる人は散りなむ後ぞこひしかるべき。

己れは面白かるべけれど人の苦しまむは心うし。

の如きものである。次に事の可能を推量するものは

出來得べくんば明朝直ちに決行せよ。

水底の玉さへ清に見つべくも照る月夜かも夜の深けゆけば。（萬葉・七ノ一〇八二）

立てそむる志だにたゆまずば龍のあぎとの珠も取るべし。（大國隆正）

から衣たちかはりぬる春のよにいかでか花のいろを見るべき。（新古今・十六）

の如きものである。適當はそれを爲すことの當を得たることであるが、その適當の意味が更に強力となれば義務であり命令であり決意である。例へば

見渡せば比良の高ねに雪消えて若菜摘むべく野はなりにけり。

楊貴妃のためしも引きいでつべうなりゆくに……

岩くゞる瀧の白糸たえせでぞ久しく世々にへつゝ見るべき。（後拾遺・七）

今度のゆきあひはあんべい事かはと思し絶えたり。（濱松中納言）

以て仕ふべければ則ち仕へ以て止むべければ則ち止み以て久しかるべければ則ち久しく以て速かなるべければ則ち速かなるは孔子なり。

人は必ず道德を守るべきものなり。

事務を執るには瑣事たりとも仔細に吟味すべし。

來る三月一日には是非登校すべし。

明日は必ず決行すべし。

の如きものであるが、その命令或は決意となるものはそれが終止形をとる場合である。この「べし」に「あり」を

融合せしめた形のもの（正しくは「べか」に「り」の添着せるもの）は「べかり」である。それは

この人のあんべからむさま夢に見せ給へ。（更級）

我も人も物思なくて過し給ひつべかりける世を心とおぼし歎くを（源氏・須磨）

なほ朝政は怠らせ給ひぬべかんめり。（同・桐壺）

縷々として絲綱を放つこと幾千萬條たるを知るべからず。

戀しけくけ長きものを逢ふべかる夕だに君が來まさざるらむ。（萬葉・十ノ二〇三九）

造次顚沛にも忘るべからざる訓言にあらずや。

學生たるものよくこの言を味ははざるべからず。

の如く種々に用ひられてゐるが、最もよく行はれてゐるものは未然形に「ず」「ざり」を添へた形である。しかしてそれは「べし」に對する打消形の如く使用せられてゐるのである。又古くは「べかし」「べけ」「べけり」などといふ形のものも行はれてゐたやうである。例へば

今様の人は幼うよりあるべかしうこそあれ、これはいかなることにか。（狹衣・三上）

物まめやかにあるべかしう書きたまひて（源氏・玉葛）

文王何ぞ當るべけんや。

墓の上の木の枝靡けり聞きし如血沼壯にし依倍家良信母。（萬葉・九ノ一八一一）

更に形容詞のやうに根「べ」に接續「ら」「み」の添加せられた「べら」「べみ」もあつた。

鳴きとむる花しなければ鶯もはては物うくなりぬべらなり。（古今・二）

峰たかき春日の山にいづる日はくもる時なく照すべらなり。（古今・七）

まねく往かば人知りぬべみさね葛のちもあはむと（萬葉・二ノ二〇七）

佐保山のはゝその紅葉散りぬべみ夜さへ見よとて照す月影。

「べし」の確信的なるに對し、信念なき疑惑的推量の「らむ」は次の如く行はれてゐる。

憶良らは今は罷らむ子泣くらむそのかの母も吾を待つらむぞ。

袖ひぢてむすびし水の氷れるを春たつ今日の風やとくらむ。（古今・一）

大原やをしほの山も今日こそは神代の事も思ひいづらめ。（古今・十七）

打消推量の助動詞は略〻次の如きものである。

未然	連用	終止	連體	已然
（まじく）	（まじく）	まい（まじ）	まい（まじき）	（まじけれ）
（まじから）	（まじかり）	（まじかり）	（まじかる）	（まじかれ）

「まい」は文語の「まじ」の變化形で、終止形に附く場合は四段系動詞に於てである。

とても間にあふまい。
そんなことはあるまい。
もう言ふまい。
行くまいものでもない。
しかし「ます」には終止形に附くのである。
又事實それには相違ありますまい。
もう行きますまい。
かくて一段系動詞には一般に未然形に附く。
そん事は引受けまい。
五時には起きられまい。
こゝへはもう來まい。
しかし佐行三段では普通連用形に附く。
彼ならそんなへまはしまい。
信じまいものでもない。
文語系の「まじ」は次の如く用ひられてゐる。
この人えまぬかれ給ふまじくば己を殺したまへ。（宇津保・國讓下）

げにえたふまじくない給ふ。（源氏・桐壺）

うけたまはりすごすまじうなむ。（宇津保・菊の宴）

此の世には又も見るまじ梅の花ちりぢりならむことぞかなしき。（詞花・十）

よるまじき川のくまゝ（仁德紀）

一引もひくまじいものをとひとりごとばし居たる。（平家・七）

おのが親の上をかく申すまじけれど（宇津保・忠こそ）

和田が居うずる座敷に祐成が居まじいかと（幸若）

「まじかり」は言ふまでもなく、「べかり」の「べし」に對する如き形のものでみかどにて子をもたらむもめでたくもあるまじからむ。（宇津保・樓上）

なき跡まで人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな。（源氏・桐壺）

の如く用ひられてゐる。右の外上代では疑惑推量として「ましじ」といふ形のものがあつた。例へば

玉匣三室の山のさなかづらさねずば遂にありかつましじ。（萬葉・二ノ九四）

かくばかりもとなし戀ひば故郷にこの月ごろも有りかつましじ。（同・四ノ七二三）

已我得麻之字岐帝乃尊岐寶位乎（續紀・四十五詔）

暫久乃間毛忘得末之自美奈毛悲備賜比（同・五十八詔）

の如く用ひられてゐるものである。之は「まじ」が「む」の變化形「ま」に「じ」を接したものであると同樣、「ま

し」に「じ」を接したものである。

以上述べた推量助動詞の中、文語のもので所接上多少異例あるものに就いて一言して置く。それは主として良行變格に對するものである。卽ち先づ良行變格は終止形が「い」韻であるところから

際限あるべからず。

さることはあるまじ。

今十日の後なるべし。

考察は長かるべく決斷は速かなるべし。

の如く、「う」韻の連體形に添へられるのである。然るに之に類推してか、二段でも三段でも

この事決して忘るゝべからず。

以後かやうの事はするまじ。

の如くし、その他鎌倉時代頃から

この所に塵芥すてべからず。

決して御心配かけまじく候。

馬の右を御目にかけべし。（今川大双紙）、

しひて乘らせべからず。（三體家法）

の如き誤用が頻出した。次に又上代では良行變格に對して

武庫の海のにはよくあらし。（萬葉・十五ノ三六〇九）

今宵は鳴かずいねにけらしも。（同・八ノ一五一一）

風を疾み奥つ白浪高からし。（同・三ノ二九四）

世の中はかくのみならし　同・三ノ四七八）

の如く、その根に直ちに接せられるものもあつた。しかして之に似た現象は

乙女らし春野の菟芽子採みてにらしも。（萬葉・十一ノ一八七九）

我に似べきは誰ならなくに。（土佐）

春立てば花とや見らむ。（古今・一）

來て見べき人もあらじな。（後撰・一）

之を射べきか射まじきか。（盛衰記）

の如く、一段にもあつた。

以上は、助動詞が如何なる活用語尾に添接するものであるかといふ、所屬活用形に基準を置き、個々の助動詞それ〴〵が如何なる動詞的陳述性を延展開示するものであるかといふことを考察して來たのであるが、次にそれら助動詞の相互關係に就いて考へてみる。

助動詞をその語形から見れば、動詞系のものと形容詞系のものと助動詞特有の形を具するものとの、三種に大別することが出來るのであるが、それらの中で、動詞系のもの及び「う」「よう」「ぬ」「ず」などの如き一部の助動詞特有の形のものは略〻機能が動詞に類似して居り、動詞的であると言ふことができる。又形容詞系のもの及び「まい」「まし」「じ」「らし」などの如き一部の助動詞特有の形のものは略〻機能が形容詞に類似して居り、形容詞的であるといふことができる。隨つて前者には更に他の助動詞を添へて行くことができ、後者には絶對にそれが不可能であると一應考へることができる。しかし動詞的であると言つても、形態的に整つて居ない「む」「らむ」「けむ」などの四段系のものや、「う」「よう」「ぬ」「ず」などの助動詞特有な形のものには、殆んど他の助動詞が膠着しないのである。故に助動詞中、眞に他の助動詞を下接し得る能力のあるものは、一段系の「れる（る）」「られる（らる）」「せる（す）」「させる（さす）」「しむ」「つ」「ます」などと變格系の「ぬ」「ざり」「た（たり）」「けり」「べかり」「めり」「まじかり」などとであつて、それ以外の形容詞系のもの四段的のもの及び助動詞特有の活用のものは、他の助動詞を全然下接することのできないものと言はなければならぬ。

右の如く助動詞の中には、他の助動詞を更に下接し得るものと然らざるものとある。それは全く助動詞としては第二義的な活用形態の如何によるものである。然るに之に反して、他の助動詞にそれが下接するかどうかといふことは、その助動詞の本質に關係ある事實と考へなければならぬ。一體、助動詞といふものは動詞語尾に添接しその動詞的陳述性を延展開示することを任とするものであるから、之を大ざつぱに考へれば、それが動詞であらうと助動詞であらうと、その語尾が動詞語尾として然るべき活用形をとつてゐさへすれば、何れも同樣に之に下接し得る

笘である。然るに助動詞中、さうでないものが幾らかある。本動詞の語尾にならば容易につくが、助動詞の語尾となると、それが動詞系のものであつても容易につかないものがある。それは如何なることであらうか。それは勿論形態的制約を超越した事實であると考へなければならぬ。他の助動詞を下接せしめる力は活用形態の然らしむるところであるが、かく他の助動詞に下接することを拒否する力は、形態的制約を超えたものでなければならぬ。しかしてかゝる形態的制約を超えたものといふのは、その助動詞の一義的本質そのものでなければならぬ。その助動詞が動詞に從ふことが出來るが、他の助動詞には從ふことの出來ない、より高次的なものであるといふことでなければならない。それは動詞の陳述性的內容を延展開示するが、他の種の助動詞によつて一旦延展開示せられたものを更に延展開示することの出來ない性質のものであるといふことでなければならぬ。謂はゞその陳述性が本動詞と他の種の助動詞との中間的なものであるといふことでなければならぬ。かく考へると、之は助動詞範疇の中核に觸れたもの、否その第一原理ともすべきものと言ふことができるのである。

かやうなことを考へる端緒となるものに口語の「ます」がある。「ます」は絕對に他の助動に下接せられることがないのである。「ます」にはあらゆる他の助動詞が下接するに拘はらず、「ます」自身は他の助動詞に絕對に膠着することがない。かやうなものを助動詞とすることが適當であるかどうか。助動詞中、かゝる「ます」の如き連續關係のものは一つもない。「ます」は助動詞群の中に孤立してゐる。助動詞組織の中に入り得ない一個の助動詞樣のものである。「ます」と同樣な連續關係のものを若し他に求めるとするならば、それは寧ろ動詞群の中に見出すより外にないであらう。元來「ます」は「申す」より來たものである。「申す」が形式化し常に補助動詞として用

ひられるやうになつたものである。しかしてそれが未だ動詞としての性能を全然精算し、眞の意味の助動詞となり切らない、過程的なものである。

かゝる動詞的「ます」が他の助動詞に絶對に下接しないといふことは、爾餘のものを考へるよい基準となるのである。そこで今こゝで考へようとするものは、「ます」の如く全然孤立的に他の助動詞に下接せざる底のものではなく、助動詞組織中に一領域を形成する一群の助動詞である。それは未然形所屬の間接表現の助動詞「れる（る）」「られる（らる）」「せる（す）」「させる（さす）」及び「しむ」である。右の中「しむ」は多少他のものに下接することがあるものであるが、その他のものは絶對に外の助動詞に下接することがない。しかもそれらは相互に一定の然るべき形態的制約の下に相下接し得るのである。例へば「れ－させる」「れ－さす」「られ－させる」「られ－さす」「せ－られる」「せ－らる」「させ－られる」「させ－らる」「れ－しむ」「られ－しむ」「せ－しむ」「させ－しむ」「しめ－らる」「しめ－さす」の如くである。これまでは多く、かやうな一群の助動詞を他の助動詞と殆んど同格的に取扱つて來た。縱、特殊的に取扱はれるやうなことがあつても、それは時の助動詞などと對立的に考へられてゐるものであつて、全く西洋文典に源を發するものに外ならない。しかし、それでは日本語の助動詞組織といふものを眞に摑むことができないのである。助動詞の眞の範疇づけをすることができないのである。さらばと言つて又之を他の助動詞と極端に區別するの餘り、動詞語尾と殆んど同樣のものであるかの如く考へてもならぬ。動詞語尾は言ふまでもなく、全く動詞そのものの一部分をなすもので、離接的な助動詞と異なるものでなければならぬ。のみならず、之等の助動詞は前記の如く相互間に於て上下に連續し得るものである。他の助動詞にこそ下接を拒否する

ものであるが、それら一群の間では規則的に相下接するのである。只それらは一つの助動詞的領域を造つてゐるに過ぎない。

かやうなものを助動詞研究に於て如何に考ふべきか。單に之を他の助動詞と同格的に考へても、又之を動詞語尾の如きものと考へても、それは當を得ないものであるとすれば、その適當なる考へ方如何。私は之等一群の助動詞を一次的助動詞と考へ、爾餘のものを二次的助動詞と考へて行かなければならぬと思ふのである。卽ち一次的助動詞といふのは助動詞相互間の連續に於て他の助動詞を容易に下接し得るが、それら相互間以外に絶對に他の助動詞に下接することのできないものである。之に反して、他の助動詞を下接し得ると否とを問はず、特別な理由なき限り他の助動詞に容易に下接し得るものが二次的助動詞である。しかして一次的助動詞は何れも未然形に膠着するものであり、斯くて動詞の意志性を直接的より間接的に變曲せしめる、間接表現をその任とするものである。この二次的助動詞には間接表現の方途により、消極的方向をとるR系統のものと積極的方向をとるS系統のものとがありそれ〴〵又所接により相分れるのである。

二次的助詞には種々のものがある。しかし之を先づ動詞的陳述の生命とも言ふべき意志性に直接關係あるものと然らざるものとに區別する。前者は一次的助詞と同樣未然形に膠着するものであり、之には客觀的なるものと主觀的なるものとがある。客觀的なものとして普通種々の打消があり、主觀的なものとしては各種の豫想がある。之に對し、動詞の意志性に直接關係することのないものには、連用形に膠着しその理智性を開示する性質のものと、終止形に膠着しその感情性を流露せしめる性質のものとがある。前者には現實より過去への廣義の過去と、未來を現

實への希望とがあり、前者には更に現在の完了と過去の回想とがある。終止形に膠着するものにはその感情流露が純粋なるものと知性或は意志の介入せる種々の推量とがある。二次的助動詞は大略以上の如きものであるが、之等は何れもその連續が比較的緩く自由であり、それだけに又動詞的陳述に對し影響するところが淺く、一次的助動詞の如く動詞性そのものに大變動を與へるものではない。